

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第5回】武漢攻略戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十三年六月一日、聯隊は武漢攻略作戦に着手した。

「正陽関攻略戦闘」

聯隊主力は鳳台及び壽縣攻撃の為、師団直轄部隊となり十里舗を出発。蒙城～鳳台道に沿い前進した。

六月三日正午、三官廟に達したとき、師団は右縦隊を以って鳳台の敵を、左縦隊を以って壽縣の敵を攻撃するに決し、聯隊は右縦隊長の指揮下に入った。

然るに、夕刻になって師団長は、鳳台の敵は遂次退却の兆しあり、又我が第三師団の一部は壽縣方向に前進中との情報を得て、右縦隊を改め、右追撃隊として正陽関に向わせた。

四日朝、追撃隊長は第三大隊（山砲兵一個中隊基幹）を迂回隊として双橋集方向より正陽関北側に進出させ、第二大隊を師団直轄とし、聯隊主力は追撃隊長の指揮に復帰し、前進を開始した。

四日夕刻潤溝集正陽関北岸に達した時、正陽関附近より射撃を受けた。敵は迫撃砲、機関銃を有する約三千の兵力を以って、淮河を障害として固守していた為、攻撃容易ならず、第一大隊をして渡河を準備させた。

五日早朝、迂回隊第三大隊は正陽関西北に進出、聯隊長の指揮下に入った。聯隊は第三大隊を右、第一大隊を左第一線とし攻撃前進を開始した。一一〇〇第一大隊が渡河を開始し、前岸に達した時、八里塚方面（淮河左岸）の敵の側射を受け前進意の如くならず、第三大隊又前面の敵の猛射を受け、渡河困難を来たしたが、諸隊銳意力攻、翌六日、〇二四〇第一大隊は正陽関北門外を占領した。

聯隊主力は第一大隊に続行し、〇四〇〇渡河完了。〇六〇〇正陽関に突入、第三大隊は淮河北岸を確保し強行渡河、敵陣地に突入し遂に正陽関東門を占領した。

六月六日、正陽関占領後、二千の敵は、正陽関西側淮河左岸堤防に陣地を占領し、正陽

関を射撃し我が部隊の行動を妨害した。八日之を攻撃し、多大の損害を与えて撃退し、爾後処々の残敵を討伐しつつ同地の警備に任じていた。

六月十六日、敵は開封西北方地区に於いて黄河南岸堤防を破壊し、潁河上流方面は大氾濫を起し、正陽関附近も又大洪水となった。

之がため、諸隊は正陽関東側の安全地帯に移動し、予防処置をとった。このため警備上多大の煩瑣を加えた。

「蘆州に於ける警備」

当時師団は、軍より爾後六安攻略の内命を受けていたが、黄河氾濫による影響の為急遽蘆州に転進を命ぜられ、聯隊は十六日早朝宿营地を出発し、豪雨をついて悪路を冒し、午後四時壽縣に到着した。

聯隊は四梯団内の第二梯団内にあつて、二十三日壽縣出発、泥濘な道路及び橋梁を補修しつつ、途中六泊の上、二十八日蘆州に入城した。蘆州附近には土匪頻繁に出没するを以つて、之が討伐と懐柔策を併用し、作戦計画に遺憾なきよう努めた。

我が中支派遣軍は、武漢地方の要地を攻撃すると共に、随時所在の敵を撃破し、敵の抗戦意志を挫折せしめ、第十一軍を以つて長江に沿う地区並びに江南地区を作戦し、粵漢線を遮断すると共に大別山系を突破して、第十一軍と相俟つて武漢を包囲し、之を攻撃するにあつた。又北支軍は一部の陽動によつて、鄭州方面に敵を牽制し中支軍の作戦に協力するものであつた。

蘆州占領以後師団は遂次蘆州に到着し、聯隊は城内に宿営していたが、七月下旬に至つて軍主力も遂次蘆州附近に集中し来り、為に聯隊は桃鎮に次いで舒城に至り警備に任じた。

舒城附近は敵に近接しており、住民一般は敵意を有し又正規軍の出没も頻繁で、数回に亘り夜襲してくる状況で、警備間第三大隊及び第五中隊は敵遊撃隊のため再三襲撃を受けるも其のつど之を撃退した。このため聯隊も警備を厳にしていた。

「霍山攻略戦」

八月二十五日聯隊は、左側支隊の基幹（第三大隊欠）となり舒城を出発し、霍山に向い前進した。二十八日午後四時、霍山北方八キロの下符集附近に達し、午後六時より攻撃に移った。霍山附近は山地で、敵は巧みに要点を占領して頑強に抵抗し攻撃は容易に進まず、翌二十九日、第一、第二大隊をして攻撃、旅団と連絡不能に陥つたが、聯隊長は独断攻撃を続行し、二一〇〇漸く敵陣地を奪取し、その夜霍山城内に入った。

三十日、晴れの入城式を挙げ、霍山縣政府前庭に於いて「天皇陛下万歳」を三唱、感激の涙を払う間もなく主力は怒涛の如く大別山北麓に向い進撃を開始した。

「史河に向う転進及び富金山攻略」

八月三十一日、聯隊は霍山を出発し師団主力に追及するべく強行軍により、九月三日夕開順街に到着、師団主力に合した。

当時師団主力は、葉家集西側地区の敵に対し史河の線にて攻略を準備し、一挙に順家店、柳樹店の線に進出する如く企図していた。

支隊到着を期し直轄とし、師団は攻撃前進に移ったが戦闘進捗せず、決心を変更し左翼隊に我が聯隊（第二大隊欠）を増加して富金山以南の敵陣地を攻撃せしめた。然るに富金山は標高八百メートルにて、当面敵陣地の重要な一拠点であり、其の抵抗は極めて頑強であった。頂上一帯は、険峻に堅固なる掩蓋を築き、弾薬を豊富に準備し、一大要塞の連続であった。各隊敵前二百メートルに接近するも、敵陣頗る頑強にして戦闘進捗せず、夜に入り聯隊は猛攻を続行し、敵前近距離に肉薄したるも手榴弾の猛反撃を受け遂に戦闘膠着した。然し態勢を整え連日果敢なる攻撃を続行し富金山頂上の望楼高地を占領確保した。

聯隊は八月二十五日以来、炎熱を冒して霍山攻撃に任じて疲労の結果、当地方風土病マラリヤ患者を続発し、これが為一個中隊四十名を下るものもあり悪戦苦闘となり、死傷続出する状態に陥った。戦闘員激減し、一個大隊の兵力百名内外となる等、戦闘悲惨を極めたるも聯隊は一丸となって突撃に突撃を敢行し、九月十一日夜、遂に富金山一帯の高地を占領した。頂上に翻る日章旗を仰ぎつつ「万歳」を絶叫せし時は、全員ただ感激の涙あるのみであった。

富金山占領で師団正面の全陣地は一斉に瓦壊し、十二日全く我が手に帰した。

「新店附近の戦闘」

九月十八日聯隊は、沼田支隊となり三河口北方大別山山系を占領する目的を以って、支隊の前衛となり、第二大隊を先遣隊として新店に向い前進した。一〇〇〇ト家河に至り、前夜よりト家河附近に陣地占領中の敗残兵を掃蕩中の第三大隊を前衛とし急進中、盛家店地区に於いて敗敵を駆逐しつつ翌十九日一〇三〇、柱堡石北方地区富士山型高地に達した時、同地附近に陣地占領中の約三百の敵と衝突、前衛は機を失せず攻撃を開始し、砲兵協力の下、十九日夕刻より主力を以って攻撃し翌二十日一九三〇望楼高地を占領した。

新店附近の敵陣地は堅固で、この兵力一千を下らざるを知り、支隊長は聯隊主力を右翼

隊、歩五十八主力を左翼隊として、二十日払暁より攻撃を開始した。

二十一日主力を以って、遂次右方より迂回し、険峻なる山地を突破して勇猛果敢に突進した。同日第二大隊は望楼南方千五百メートル高地に突進し、翌二十二日第三大隊は駱駝山に突進、同高地を占領した。聯隊主力は同日、二軒家高地に進出した敵を撃滅、同地を占領し、第三大隊を支隊全般の状況上、翌二十三日二軒家高地に招致し同地附近を確保させ、爾後の攻撃を準備させた。

第二大隊は攻撃を続行し、二十八日赤禿山を占領。爾後聯隊は連日各連峰の攻撃を続行、師団主力の右側を援護した。

十月八日〇九三〇、山砲第一大隊及び迫撃中隊協力の下に雀尖及び新店山の敵を攻撃し翌九日、第二大隊は新店山北側高地を占領、繰返し寄せ来る敵の逆襲を撃退し同地を確保した。十一日、雀尖に対し態勢を整え攻撃、第三大隊を右、第一大隊を左第一線として猛攻し雀尖を占領、更に十二日、尖山に攻撃を敢行、敵前至近に肉薄せしも敵の側背射烈しく成功ならず、十五日より師団と共に尖山に対する攻撃を準備した。

十月二十二日攻撃を開始し、遂に敵最後の拠点、尖山を奪取し新店北側陣地一帯を占領した。

蘆州警備以来戦闘地は、支那奥地の内陸的炎暑の候で、無風で夜に入るも炎熱去らず、睡眠出来ない日も多く又地方的に物資枯渇の為、栄養不良並びにマラリヤ患者を続出し、著しく戦力を消耗した。

六月二十五日と九月一日の如きは、直射日光百三十度にて渴病患者もまた多発した。

商城附近到着後は、夜間寒冷を覚え、九月に入り長雨が続き、寒冷と雨露凌ぐ民家乏しく、道路又泥濘となり聯隊の戦闘行動を阻害し、師団後方機関の運行にも影響し、師団主力の大別山突破作戦開始を著しく遅延させた。

又、活発なるゲリラ戦により補給意の如くならず、山中の甘藷を利用し僅かに食欲を満たすが如き境地にあった。

大別山山系は特に険峻で、標高六百～千二百メートルを有し、路外は断崖と言うよりは岩石削立した千仞の谷地であった。

(参考文献「新発田聯隊史」「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より)